
触手になろう！

ささやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触手になろう！

【Nコード】

N1515BA

【作者名】

ささやか

【あらすじ】

就職難にあえぐ大学4年生・高崎は、公衆トイレで触手に遭遇。妄想かと疑う高崎に、触手は驚きの提案をする。「触手になって働きませんか？」

無駄にテンションの高い電波系コメディ、でしょうか。ちなみにエロ要素は皆無でございます。触手なのに。

第一話 『出会いは公衆トイレから!』

「社会なんて、社会なんて、糞喰らえだああああ!」

児童公園に、俺の絶叫が虚しく響く。時刻は深夜。偶々通りすがった残業帰りの中年サラリーマンから、（まあ、若いうちはそんなこともある。わかるよ）と同情と驚きの入り混じった一瞥を貰うだけで、他に何も起きない。事態は好転しない。暗転もしない。

「……もう消えてなくなってしまうたい」

二月の風は余りに冷たく、心身共に凍てついていく。

「就職とかもう普通に無理だ。……どうせ俺は駄目人間なんだ」

酒臭い息と吐いた言葉は優しく、だが鋭く自らの心を切り裂いた。

「そうだ、無理なんだ。どうせ俺は社会不適合者なんだ。無理に決まってる。特に志望もないし、特技もないし、大学時代だって適当にサークルやってたらだと単位を取れる程度に勉強してただけで特別なことなんて何もやってないし、体力も知力も才能も根気も人格も長所もないし……、ああ、駄目だ。駄目なんだよ、畜生!」

そもそもあれだよ、あれ。最近の就職活動っておかしいだろ、いや絶対おかしい。テレビとかでも言ってたし。あつ、教授も言ってた。これはもう間違いないな。ほら、学生の本分は勉学だろ? なのに三年なんて一番脂の乗った時期に上辺だけの志望動機を必死に考えさせるなんて馬鹿げてるだろ。なんだよそれ。絶対おかしい。おかしいって。学生は企業の掌の上でいかに上手くピエロみたいにダンスが踊れるかが試されてさ、でも企業だって意味のないダンス

を踊らせるように踊らされてるんだ。滑稽だ。無様この上ないな。でさ、優等生な模範的建前って言えば舌触りも良いけど、結局それって嘘じゃん。そんなこと本気で心の底から思ってるって考えることの出来る奴らばっかだったら世の中もっと上手く回ってるって。というか死ぬね！ 半分くらい人類死滅しろ！」

握りしめていた缶ビールの残りを一気に煽る。炭酸も抜けぬるくなったビールは酷く不味かった。というかそもそもビールが嫌いだった。

「大怪物が来て、世界を滅ぼせば全て解決するんだ！ 早く来い！…… あーあ、生まれ変わったら高等遊民でいたい」

ゴミ箱めがけて空き缶を投げる。カコンツ、と無機質な音を立てゴミ箱に届くことなく地面に落ちた。最高に最低な気分だった。悲しくなる。自分はゴミを捨てることすら満足に出来ないのだ。

重い腰を上げて今度こそ確実に投げ捨てる。ふう、と溜息をつく。尿意を覚えた。ビールの飲み過ぎだ。ついでに公衆トイレまで足を運び、用を済ませる。

どこにでもあるような公衆トイレだった。汚く、みずばらしい。どうして公衆トイレというのはどれもこれも汚れているのだろうか。皆公共の物だと思うと、使い方が雑になるのだろうか。それとも年代物で設備が旧式だからそう見えるだけで、実は意外と清潔なのだろうか。それか何か他に理由があるのだろうか。

そんな益体もないことを考えながら中に入ると、そこには触手がいた。

触手がいた。

「きゃっ」

女の声で可愛らしい悲鳴を上げた。

うん、あれだ、あれ。一体どうやって声を上げているんだろう？
口つてあるの？ 謎だ。実に謎だ。非常に興味深い……、って

「わあああああああああああああああああああ！」

触手だよ！ なんかイソギンチャクみたいな触手が壁面という壁面から湧き出てトイレでうようよ蠢いてるんですけど！ 大きさ？ 中学生の腕くらい！ 色？ なんかアダルトサイトみたいなピンク色！

「ば、ば、ばけ、いや、触手だあああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

俺と触手の悲鳴が絶妙なハーモニーを奏でる。そりゃあもう奏でるったら奏でる。

俺は走った。

全力で走った。韋駄天を軽く追い越すような激しいスピードで逃げた。警官に見つかったら、職務質問自分錯乱病院搬送人間失格コース行きが間違いないくらい必死だった。なんか生きてる気がした。気分がハイなってきた。最低に最高の気分だった。

「人生って……！　素晴らしい……！　つなわけねーだろ！　なん
で触手なんだよ、おかしいだろ！」

あれだ、あれ。とうとう貧相な頭が、人生の荒波に耐え切れなくな
って幻覚を見るようになったのだ。幻聴を聞くようになったのだ。
ただ内容が触手なのは俺の想像力が貧困だからなのだ。きっとそ
うだ、そうなのだ。

さあ、急いで我が家に帰ろう。俺の膀胱も限界が近い。

第二話 『就活生はうさぎよりも傷つきやすいのです。注意っ！』

神様がいるとしたら、そいつはどんな顔しているんだろう。そして今、どんな表情をしているんだろう。

なんてことはどうでもよかった。とてもどうでもよかった。

それよりもバスが五分遅れているとか、隣のおばさんの香水がきつすぎてもはや臭いとか、スーツを着るとやっぱり息苦しいとか、そんな馬鹿みたいに些細なことが重要で仕方なかった。

そしてもっと重要なのは、俺はやっぱり駄目人間だということだ。また、落ちた。残っているのは後二社。

痛い。胃が痛い。もしもこれで内定が取れなかったら、俺はどうすればいいのだろうか。就職浪人か、フリーターか。あるいは社会不適合者としてその適性を十二分に発揮するのだろうか。胃が、とても痛い。気分が悪い。死にたい。死んでみたい。

気分転換がしたくて、というか日常的生理作用がしたくて、俺はトイレに行きたかった。バスを降りてから早急にトイレを探す。神様よりもトイレが必要だった。

だが無い。無かった。トイレが無い。トイレはどこだ！俺はさながら犠牲者を求めるゾンビのようにトイレを探す。なんとかコンビニに飛びこみ、トイレを借りる。

正に危機一髪。紙一重の攻防だったと言っても過言ではない。俺

は便座に深く座りこみ安堵した。

そしてふと顔を上げると、触手がいた。

触手がいた。

「あ、あの……」

前回と同様可愛い声。

うん、あれだ、あれ。今の俺って普通に逃げ場ないな。排泄中の人間ってとっても無防備。戦国時代の武将が気を遣っていたのが実感出来るよ。

いや、待て。そうだ、思い出した。これは俺の貧困な想像力が就職戦争に倦み疲れて生み出した幻覚・幻聴であり、何も恐れることはないのだ。そうだ、その通りだ。立ち向かおう。自らの社会不適合者としての象徴と対峙して、打破するのだ。物は試しと人は言う。

ならば、と俺は触手にふれてみた。ぷにっとな。

「はわっ」

驚きの声が触手から上がる。

だが俺の驚きはそれ以上だった。うわー、柔らかーい。ふにふにふにふに。人肌のように柔らかい。俺は無言でさわり続ける。もうあれだ、あれ。どうにでもなれ。

「や、やめてください!」

「俺が言いたいわ！ 触手は妄想に帰れ！」

我に返り大声で叫ぶ。幻覚のくせになんで感触があるんだよ！

「わたし、妄想じゃないです！」

「うるさい、帰れったら帰れ！」

「話せばわかります！」

「まずコミュニケーションがとれること自体が理解不能だわ！ □
どこだよ！」

「無いです。触手ですから」

「無いのかよ！」

「テレパシー的なアレです」

「アレの部分を詳しく説明しろ！」

衝動的に叫びながら自分が触手と意思疎通が出来ていることに気づいてしまう。すると、ここまで興奮していることが一気に馬鹿らしくなる。なんかもういいや。いや、よくない。

「……もう、なんだよ、これ。わけわかんねーよ」

俺は大きな溜息をつき、深く頂垂れた。便座・the・考える人になる。

ちっ、ちっ、ちっ、ちーん。

よし、決めた。適当に流して現実に帰ろう。そしてこのことはネタにしよう。「なあなあ、以前トイレに行ったらなんか触手がいて」みたいな。飲み会で言えばそこそこウケもとれるだろう。それでいいや。

「あ の」

触手のくせにこちらを気遣うような声音で言う。

「大丈夫ですか？」

「ああ、うん。オッケー、オッケー。じゃ、そういうことで」

俺はＦ１レーサー顔負けの速さでトイレからの脱出を試みる。

が、「待つて」と素早く触手にからめ取られた。やっぱり柔らかい。絶妙な弾力。女の子のおっぱいを彷彿させる。

「話を聞いて下さい」

「嫌だ、話せどわからぬ！俺は現実に帰るんだあ！」

しかし触手の力は強く、懸命の脱出活動が実を結ぶことはなかった。

「どうか話を、話を聞いて下さい。お願いします」

触手はくねくねとその身を揺らし哀願する。哀願するつたら哀願する。

「お時間は取らせません、五分、いえ三分で結構です。どうかお願いします」

「えっと……」

「お願いします。この通りです」

「ああ、うん」

どの通りだよ。

「あー……」

でもあれだよ、もしここで断つたら俺、悪い人？　なんか罪悪感がちくちくするんだけど。いや、そうだよ、ここで断つてもなんか気分悪いし精神衛生上非常によくないよね、そうだ、それならいつ最後まで自分の生み出した幻覚・幻聴と対峙して、見事克服してやろう。それだ、それで行こう。キャッチフレーズは「自分から逃げない俺」。よし、かつこいい。

「わかった、わかったよ。話を聞くよ」

「本当ですか？　嘘ついたら触手千本飲ませますからね」

「地味に恐ろしいな、おい」

「えーと、それでは」

「こほん、と触手は可愛らしい空咳をしてから言う。

「一緒に働きませんか！」

「……………は？」

「だから触手になって働きませんか？」

「……………はあ」

「えっと、その、お仕事、大変ですけど、やりがいもありますし、それなりにいいこともあるし、きっと待遇もまあまあだと思います。どうですか？」

「いや、どうですかと言われても……………。それ、「人間辞めませんか？」ってことじゃん…………。」

「慣れれば平気です、慣れれば！ 最初はうねうねして上手く動けないですけど、慣れれば自由自在に操れますから。ほらっ」

触手がうねうねとのたうちまわる。妙に煽情的だった。

だが俺の頭脳は処理能力が低いからか、自分の置かれた境遇を認識出来なかった。いや、違う。落ち着け。俺は悪くないだろ。状況が異常なんだよ。

そして戸惑う俺に対し、触手は禁断の台詞を口にした。

「お仕事、決まらないんですよね」

プ
チ
ン

「うるっせええええええええええええええええええええええ！」

「姑が嫁に向かつて、『ねえ、まだこもできないの?』って嫌み
つたらしく尋ねるようなことするなこらあ! こちとらナーヴァス
なんだよ!

「お前なんか、お前なんか就活の苦労がわかってたまるかあああああああああ！」

触手のくせに触手のくせに触手のくせに！

「だらっしやあああああ！」

「ああっ」

俺は無理矢理触手の拘束を振りきってトイレから逃げ出した。

「待って、待って下さい」

触手の声だけが追いかけてくる。

誰が待つか。

第三話 『とりあえず気のせい!』

コンビニの店員に、「あまりトイレで叫ばないで下さい。叫ぶならカラオケ行つて下さい。それが死ね」と軽く注意されたあと、俺は大学に無事到着した。今日はサークルの集まり（正確に言うと飲み会）があるのだ。就活用に買った地味な腕時計で時刻を確認する。少し遅れそうだが、まあこのくらい許容範囲だろう。

「あ、高崎さん」

こぢんまりとしたキャンパスを歩いていると、とてとてと小走りでこちらにやってくる女の子がいた。サークルの後輩、佐藤だ。

「なんだ、佐藤か」

「なんだとはなんですか。失敬です」

「そうか？」

「そうですよ。可愛い後輩じゃないですか、可愛がつて下さい。具体的にはジュースおごつて下さい。オレンジジュースがいいです」

「調子に乗るな」

俺は歩調を速める。遅れた佐藤が慌てて追いかけてきた。

「あつ、ちよつと、速いですって。置いてかないでくださいよ」

「うるへえ。寄るな、さわるな、近寄るな」
「また子供みたいなこと」

佐藤が苦笑いを浮かべる。栗毛のショートボブが彼女の思いを追従するかのように揺れた。

「というか寄ると近寄るって意味が重複してますよね」

「確かに。じゃあ言い直そう。寄るな、さわるな、単位を落とせ」

「最後が無駄に悪意満載なんですけど!？」

「実に気のせいだ」

「いやいやいや!」

それから佐藤は俺の台詞がいかにも極悪非道かを滔々と説明しだしたが、それはさておき、俺は触手のことを思い返していた。

あの触手は一体なんなのだろうか。俺の脆弱な精神から生み出された妄想ではない……？ うん、ないな。ないない。そろそろ現実的に非現実を直視しよう。しかし何故に触手？ そして何故に仕事を幹旋する？ わけがわからねえ。触手ってエロ本とかそういうテリトリ限定の存在じゃないの？

「聞いてますか、高崎さん!」

「ん？ ああ、聞いている聞いている。また円高になったな。これ以上続くと輸出産業がもたないから、確かにお前の言う通り、更なる政府介入を本格的に検討するべきだろうな」

「あしらい方があまりに古典的かつ適當！」

「気のせいだろ」

「そんなこと言ったら、世の中の大半は気のせいで説明出来ますよ！」

「気のせいだろ」

第四話 『二度あることは三度ある!』

「つまりは、我らが高崎君はまた落とされた、というわけか!」

塚本が俺の悲惨な就活状況を豪快に笑い飛ばす。酒も入っているからだろう、陽気な苦笑が周りに響く。

「……いや、笑い話じゃないから」

俺は憮然として溜息をついた。塚本はまだ大学院に進学するからいいが、こちらら絶対零度の戦線で体を張っているのである。

「まあまあ、大丈夫だって」

赤い顔をした塚本は俺の背中を勢い良く叩く。バシッバシッと軽快な音が鳴る。鳴るったら鳴る。痛い。体育会系の塚本は気の良い奴だが乱暴なのが玉に瑕だ。

「なんとかなるって、なんとか」

「……そう信じていたらここまで来てしまったんだ。もうその言葉は信じられない」

「いやまー、大丈夫だって」

「根拠は?」

「勘。なんとなく」

「なんだよ、それ」

釈然としない焦燥感をカルアミルクで飲み下す。うちのサークルには「とりあえずビール」という悪しき風習は存在しない。ビバ・カルアミルク。俺は甘党だった。

「んー、じゃあ、ほら、あれだよ、あれ」

「だからなんなんだよ」

「ほら、あれだよ。ねっ、久木さん、わかりますよね？」

「ああ、うん。まあわかるよ」

俺と塚本の遣り取りを傍観していた久木さんは、穏やかな笑みを口元に浮かべて答える。

「ほらみる、偉大なる先代部長のお言葉だぞ！」

「高崎君なら、なんだかんだでちゃんと納まる場所に納まるよ」

久木さんはのんびりと、そう言う。

「ねえ高崎君、たとえばの話だけど」

「はい、なんですか？」

「年に一度だけ現れて、なんでも願いを叶えてくれるサンタクロース。なんと今年はあなたの願いを叶えてくれることになりました。」

「さあ、どうしますか？」

「あつ、それって」

「なんだ、もしかして知ってる？」

俺の反応をみて、久木さんの口元がほころぶ。

「はい。あれ、いい話ですよ」

読んだことがある。有名なSF作家のショートショートだ。

「うん、あれ、好きなんだよね」

久木さんは嬉しそうにはにかむ。

「でね、大丈夫。高木君はなれるよ、最初の青年に。その権利を名前も知らぬ少女に譲った青年に」

「そう、ですかねえ」

自信がない。そんなときが来ても、俺は自分のちんけな欲望のために願いを使ってしまう気がした。

「そうだよ。なんかねえ、高崎君は結局他人のために頑張れる人だから」

「はあ」

「褒めてるんだよ？ 一応」

「はあ」

面映ゆい。塚本はうるさいが、久木さんは人が良すぎた。

「ちょ、トイレ行つてきます」

俺は席を立つ。「あ、高崎さんが逃げてる」と佐藤の酔った声が背中に降りかかる。違う。逃げてない。戦略的撤退だつての。

というわけで俺はトイレに行く。引戸を開けた。

さて、ここでクエッション。

Q：トイレには何がいるでしょう？

A：触手

「こんにちは「だが断る」

俺は引戸を閉めた。

ふう。……酔つてるかな。足取りはちゃんとしてるんだけど。

このまま戻ってしまおうとも思ったが、やはりトイレに行きたい。膨れ上がった欲望を解放したい。もう一度引戸を開け「こんにちは
！」

ぶわっ！

触手が恐るべき速さで俺をトイレの中に引きずりこむ。ここで俺のホースがなんちゃってビールをぶちまけなかったのは、一重に俺のホースが特別製であつたからだと強く主張したい。

触手はぐねぐねと元気良く蠢き、俺をきつちりと拘束していた。

「待て。話せばわかる」

俺は必死の説得を試みた。いくら特別製といえども限界が近い。生理現象には勝てなかった。

「離せ！ 離してくれ！」

「最後まで話を聞いてくれるなら」

「違う！ その前に離せ！」

「駄目です！ また逃げちゃうかもしれないです！」

「いいから離せよ！」

なんのためにトイレがあると思ってんだコラ！ 排泄するために決まってるだろ！

俺は禁断の手を使うことにした。具体的に言うと、ホースを股ぐらから取り出した。ポロつとな。

「ひゃうえあ！」

触手が乙女な悲鳴を上げる。

「な、な、な、なああああああああああああ！！」

触手はぐねぐねとのたうちまわる。ついでに拘束が解ける。俺はこれ幸いとホースから発射した。無論、便器に向かってである。

「隠して下さい！ 見せないで下さい！」

「ここはトイレだ。俺には健康で文化的な排泄をする権利がある」

「目の前に女の子がいるんですよ！ 気をつかってくだしいよ！」

「あ、噛んだ」

触手のくせに。

「ええ、噛みましたよ！ 噛みましたとも！ それが何か問題でも！？」

口ないじゃん。テレパシー的なアレなのにどうやって噛んだんだよ。

「というか性別あつたのか……」

「ありますとも。レディーです。現役バリバリのレディーです！」

「現役レディーはバリバリなんて言葉を使わないと思うが」

「使ってます！」

「左様ですか」

「左様です!」

「……んじゃ」

用を済ませた俺は、さりげなくかつ鮮やかにトイレからの脱出を試みる。

「だから待つて〜!」

が、駄目だった。触手のくせにしつこかった。

「手を洗ってないじゃないですか!」

「そこかよ」

外の流しでちゃんと洗うつもりだったわ!

「そして何より流さないで下さい!」

「使用後にトイレを?」

「わたしの話をです! わざとですよね!」

「どちらかと言わなくてもわざわざ!」

「やっぱり!」

「さっぱり」

「……うにゅらぁ~~~~~!」

触手が奇声をあげてのたうち回る。先生、今のは何語ですか。はい、あれは触手語です。和訳すると「デイス・イズ・ア・ペン」になります。先生、和訳できてません。

「もついいから話を聞いてよ!」

「また今度な」

「親が子供の駄々をなだめるための常套手段!」

「やはり触手には効かないか……。人外だしなあ」

「そついう問題じゃなくて」

そして触手は衝撃の一言を放った。

「というか、そもそも、わたし、人間ですから!」

第四話 『二度あることは三度ある!』（後書き）

星新一「ある夜の物語」 未来いそつぷ（新潮文庫）収録

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515ba/>

触手になろう！

2012年1月5日22時48分発行